

平成30年6月29日現在

機関番号：82686

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2017

課題番号：16K17357

研究課題名(和文)学童期の注意欠如多動性障害に対する症状の自己理解促進ツールの作成と有用性の研究

研究課題名(英文)A new picture-book style rating tool is feasible and useful for children with attention deficit hyperactivity disorder to promote their self-understanding

研究代表者

荻野 和雄 (KAZUO, OGINO)

東京都立小児総合医療センター(臨床研究部)・児童・思春期精神科・その他

研究者番号：90762237

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文): ADHD児に対して口頭のみ面接では、自身の症状について本人がどのように捉えているのかが不確かで、また診療の中で自己理解が進まないこともしばしばであるため、ADHD症状を描いた独自の絵本式イラストツールを作成した。作成にあたっては、本人の自尊感情を損なわず本人の自己理解が促進されることに配慮した。23名のADHD児を対象に予備的に実施し、楽しさや理解度は非常に高く、実行可能性を示された。些細な一部の問題点をイラストの修正などでツールに反映し完成とした。その後、完成版ツール『エディとハーディの一日』を用いて、24名に調査を行い、評価において親子で同様の傾向が確認でき、一定の妥当性が示された。

研究成果の概要(英文): With only oral interviews for children with ADHD, it is uncertain as to how they perceive their own symptoms, and it is often experienced that they don't develop self-understanding in our clinical practice. We created a unique picture-book style rating tool portraying ADHD symptoms. In making it, we considered that it was important to promote the self-understanding of the individual without hurting his or her self-esteem. A preliminary study was conducted on 23 ADHD children. The results showed that their fun and understanding was very high, and feasibility was demonstrated. We modified the illustration based on slight problems, and completed this picture-book style tool. After that, using the completed version "A day in the life of Eddy and Heardy", we conducted the study on 24 ADHD children. We confirmed similar trends in the children and their parents on their evaluation, showing validity to a certain degree.

研究分野：児童精神医学

キーワード：注意欠如多動性障害 ADHD 発達障害 自己理解 イラスト 学童期 子ども

## 1. 研究開始当初の背景

注意欠如・多動性障害（Attention Deficit/Hyperactivity Disorder：以下、ADHD）は、不注意や多動性/衝動性を主な症状とした障害である。DSM-5における診断基準に『不注意、多動性/衝動性の症状のいくつかは12歳までに存在していた』とある通り、学童期以前からその症状が見られる。

ADHDの状態像の把握には、他の精神疾患や発達障害と同様、本人への面接聴取を基本とするが、学童期のADHD児では、聴覚的情報のみでは理解が困難であるといった障害特性や年齢的に言語理解や表現が拙いといった問題などのため、本人からの症状の聴取が難しい。従って、ADHDの診断や治療を行なう際、本人による症状評価や本人への聴取が十分になされず、保護者や教師等による他覚的評価のみに基づく状態像把握となることも見受けられる。

一方、申請者が行ったADHD児を対象とした予備的な面接調査では、本人によるADHD症状の評価は保護者評価より症状を過小に評価することが多く、先行研究と同様の傾向を示した。これらから実際、本人自身のADHD症状の理解が不十分なことや通常の面接では十分に聴取できない可能性が考えられた。

子どもへの医療において、本人が理解できる言葉や表現で十分な説明を行なうよう配慮がなされるべきである。また、本人の症状理解が深まらないまま治療を行なったとしても本人は治療的な効果を実感できずに限定的となっていることを実感する。これらの問題点を踏まえ、ADHD児が自身の症状を十分理解できるような環境を整えていくことは極めて重要なことといえる。

しかしながら、ADHD児の特性を考慮した症状理解を促進する症状評価ツールは存在しない。そのため、上記のような状況を解消する有用なツールを開発する必要性を考え、

着想に至った。

## 2. 研究の目的

ADHD児が、自身のADHD症状について理解を促進できるような独自のイラストツールを開発し、その有用性を示すことを目的とする。

## 3. 研究の方法

### (1) ツールの考案と作成

児童精神科医師5名とイラストレーター1名で、ADHDの症状と、イラストでの表現方法について詳細に意見を交換し、より効果的なツールの作成を行う。

### (2) 実行可能性を示す

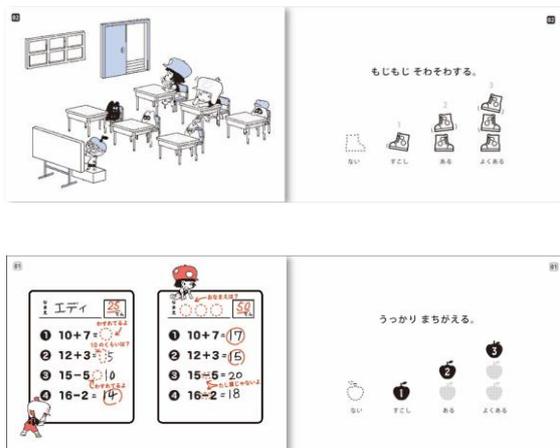
ADHDの診断基準(DSM-IVTR)を満たす7歳から15歳の児に対して、児童精神科医師が児と1対1で対面し、本ツールを用いて症状の有無と程度・頻度について質問する。児は指さしおよび口頭で回答し質問者が回答を記録する。その後見開き18ページのどこまで完遂できるかについて記録する。さらに検査施行後にアンケートを行い、満足度と理解度を評価する。

### (3) 有用性の検討とイラストツールの完成

(2)の評価と同時に、ADHD児が本ツールで自己評価した結果と、それぞれの親が回答したADHD-Rating Scale-IVの結果を比較し、自己理解の程度を推測する。さらに本ツールを通じてADHD児の自己理解がより促進される可能性を検討する。また上記の施行の中で気付かれた些細な一部の問題点をイラストの修正などでツールに反映し完成とした。その後、完成版ツールを用いて、別のADHDの診断基準を満たす7歳から15歳の児に対して調査を行った。施行に際しては、面接者の差異をできるだけ少なくするため、半構造化面接用のマニュアルを作成し使用した。

#### 4. 研究成果

(1) 交わした議論をもとに、左ページに ADHD の診断基準 (DSM-IVTR) の症状 18 項目を基盤とした 18 枚のイラストを 1 枚ずつ掲載し、右ページに対応する症状を簡易なことばで表した。ことばの下に、「ない=0」「すこし=1」「ある=2」「よくある=3」のリッカートの 4 件法を載せ、見開き 1 ページにつき 1 症状のイラスト、ことば、4 件法の選択肢がまとまった構成のツールを考案することとした (以下の図は、その一例である)。症状理解のみならず興味や楽しさも体験してもらう目的で、ADHD 特性のある架空の主人公を設定し、彼らの日常の中に ADHD 児がよくとる行動を織り込んだ絵本形式とした。本ツールの名称を「子どもの ADHD 自己理解促進ツール『エディとハーディの一日』」とした。



(2) 対象者は ADHD 児 23 名 (男児 20 名、女児 3 名) で、平均年齢は 10.5 歳、推定平均 IQ は 90.2 であった。全員が途中で脱落することなく本検査を終えた。児ひとりの検査に要した時間はおよそ 12 分であった。施行後のアンケートは、「楽しい」とした満足度は 87%、「分かりやすい」とした理解度は 96% と高い値を示した。これらの結果から、本ツールは ADHD 児が安全で楽しく実施できるツールである可能性が高いと考えられた。

(3) 個々の親子の回答で有意に関連性がなかったイラストが 2 つあったが、他の 16 枚については評価点において有意な差はなかった。また全体の親子の回答の平均値は近値を示しており一定の妥当性が示唆された。このことから、ADHD 児は親や医療者が普段想像しているよりも、自身の症状について一定の自覚を持っている可能性が推測された。また、視覚的に様々な工夫を凝らした本ツールを用いることにより、口頭のみ面接よりも、子どもの興味を引き出し本人が感じていることを回答として得られたと考える。さらに施行後の自由記述からは、児が本ツールを通して自己理解を深められた可能性も示唆された。また本ツールの信頼性としての Cronbach の  $\alpha$  係数は、全 18 項目は 0.85、注意欠陥 9 項目は 0.73、多動・衝動 9 項目は 0.76 と一定の信頼性を認めた。

完成版「子どもの ADHD 自己理解促進ツール『エディとハーディの一日』」を用いて、ADHD 児 24 名に施行したが、結果は前回の施行と同様な傾向のものが得られ、加えてイラストの修正や半構造化面接マニュアルにより、より実施しやすい形となった。

今後は妥当性の検証や幅広い利用がなされるような形を模索していく必要がある。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 5 件)

M. Ooka, T. Oka, Y. Matsuo, K. Saito, K. Ebishima, R. Kuge, M. Hiratani, K. Ogino. A new picture-book style rating tool is feasible for children with attention-deficit hyperactivity disorder to reveal their self-understanding.

23rd World Congress of the International Association for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions 2018 年

M. Ooka, T. Oka, Y. Matsuo, K. Saito, K. Ebishima, R. Kuge, M. Hiratani, K. Ogino.  
Comparison between self- and proxy-reported behaviors in children with attention deficit hyperactivity disorder using a picture-book style tool.

23rd World Congress of the International Association for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions 2018年

大岡 美奈子、岡 琢哉、松尾 侑紀、海老島 健、平谷 美智夫、荻野 和雄

子どもの注意欠如多動性障害(ADHD)自己理解促進ツール (I)製作と実施可能性 - エディとハーディの一日 -

第 58 回日本児童青年精神医学会総会 2017年

大岡 美奈子、岡 琢哉、松尾 侑紀、海老島 健、平谷 美智夫、荻野 和雄

子どもの注意欠如多動性障害(ADHD)自己理解促進ツール (II)有用性と今後の課題・展望 - エディとハーディの一日 -

第 58 回日本児童青年精神医学会総会 2017年

### 荻野 和雄

①児童思春期精神科センター病院の現状と使命 ②研究紹介 “ADHD 児に対する症状の自己理解促進ツールの作成と有用性の研究”

金沢大学 子どものこころの発達研究センター研究会 Clinical & Research Conference

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

荻野 和雄 (KAZUO OGINO)

東京都立小児総合医療センター・児童・思春期精神科・その他

研究者番号：90762237